

伍賀先生のご退職にあたって

金沢大学経済学経営学系長 堀 林 巧

65歳が定年となっている大学では、2012年度末から向こう3年に1947～49年生まれの子世代の諸先生のご退職が続く。当世代は1947年施行の現行憲法の下で戦後民主主義教育の洗礼を受け、青春期にあたる1960年代末にはベトナム反戦、大学民主化、反公害運動を経験されている。それとも関連し、社会的関心が強く、より良き社会を構築するとの高い志を持ち研究の道を選択された人も多い。伍賀先生はそうした選択をされ、大学という職場でこれまで初志を貫かれた。金沢大学退職後もそうであろうと確信する。

巻末の業績一覧表にみられるように伍賀先生の学問の出発点は社外工問題の実証研究であった。貧困化よりも富裕化が話題となり「フリーター」など非正規雇用を働き方の選択肢の拡大とし肯定的に捉える見解が優勢であった1980年代後半のバブル時代にあつて、伍賀先生は非正規雇用を「不安定就業」（半失業）と規定し、その実態を解明する著書『現代資本主義と不安定就業問題』（御茶の水書房、1988年）を刊行された。現在、非正規雇用が不安定就業であり貧困率増大の一大要因であるとすることを否定する見解はまれであろう。事実、伍賀先生の上記著書に示されている見解の先駆性は高く評価されている。

伍賀先生の研究対象は日本にとどまらない。非正規雇用増大が人材ビジネス産業（労働者派遣事業、民営職業紹介業）隆盛（規制緩和）と一体であることに着目された先生は、イギリス、ドイツ、スウェーデン、韓国における人材ビジネス産業の展開過程と非正規雇用の動向を文献・資料読解のみならず現地調査と外国の専門家との交流を通じてフォローされ日本の動向と比較する研究を行ってこられた。その成果は著書『雇用の弾力化と労働者派遣・職業紹介事業』（大月書店、1999年）をはじめ、一連の論文で発表されている。さらに、先生は日本の民間職業紹介所など日本の労働規制緩和をめぐる動向を英語論文にまとめILO（国際労働機関）の刊行物を通じて世界に発信されてきた（巻

末の業績一覧表参照)。こうして伍賀先生の研究は国内外で広く知られるところとなっている。

伍賀先生は現場を重視し社会政策研究を進められるとともに、研究成果に基づき労働組合など労働者組織に対し助言され、働く人々の労働・生活条件改善のために時間を惜しまない人であった。また、評議員、社会環境科学研究科長、学長補佐として本学の管理運営に携わられてこられた。自己と異なる見解に対して耳を傾ける公平さと、温和な口調ながら学問の自由を守るために言うべきことを言うという立場を堅持されたことは伍賀先生が主宰される会議に出席した人の誰もが認めるところであろう。

先生は温かい人であった。学生に寄り添い学業面のみならず生活面にも及ぶ指導をなされた。教員室で演習所属学生とともに昼食を取りつつ、さりげない会話を通じて彼らが遭遇している悩みを捉え、ともに考え、対処されようとしている姿を目にした時のことを私は忘れることができない。体調のすぐれない時、あるいは何らかの事情で失意にある時、伍賀先生から励まされた経験を持つ教職員も少なくないであろう。私もその一人である。

伍賀先生が退職されることは本学教職員、学生にとって寂しい限りである。私にも随分こたえる。しかし、ここで記すべきは伍賀先生が長年にわたって経済学部並びに経済学経営学系の研究・教育・管理運営の全てにわたってなされてきた貢献に対する感謝であろう。

末尾ながら、経済学・経営学系スタッフを代表してご退職後の伍賀先生のご健康とご研究の発展を祈る。